



愛知淑徳大学

URL=<http://www.aasa.ac.jp/org/igws/index.html>

ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES

Newsletter

第8号

発行年月日：1999年12月20日

〒480-1197 愛知県愛知郡長久手町長湫片平9

Phone 0561-62-4111 EX 498

FAX 0561-63-9308

E-mail : igws @ asu.aasa.ac.jp

ジェンダー・女性学研究所主催第5回定例研究会が1999年10月22日に柏木恵子先生（白百合女子大学教授/発達心理学専攻）をお招きして「父親の心理学」というテーマで開催されました。基調講演の一部をここに紹介いたします。（詳細については研究会報告書が本研究所で刊行されます。）

今なぜ父親の心理学を問うか

なぜ日本には本格的な父親の心理学研究がなかったのか。それは現実の反映でもある。つまり父親という男性や役割が日常的に見えなかったからだ。子どもが発達するにあたって親がどう養育するか、どんな家庭を運営しているか、夫婦関係などが子どもに強く影響する。前提として子どもは価値があるという考え方がある。この前提から、子どもにとって一番よい親のあり方とはどのようなことなのだろうか。貧富の差、親の教育への関心度など多様である。子どものみならず、大人も人間の生涯発達という視点から考えると子どもにとっての親という視点のみならず、親の方を問題にする必要があると考えた。親は当然養育的なものである、だから子どもにとっては暖かいものだという前提から出発しないでそれが親本人にとってどういうことかについての研究を始めた。

父親研究の背景・動機

アメリカの有名なニューヨークタイムズ紙の男性コラムニストのポブ・グリーンが「僕の赤ちゃん日記」という、子どもが生まれた日から一才になるまでを書いた日記に出会った。その本は大変面白い本でポブ・グリーンという人が子どもが産まれる妻に付き添っていて深夜にニューヨークの街に帰って来て横断歩道の所で信号が赤になったので止まった。ふと見たならば乳母車を押していた女の人がいた。そして、この本の著者は思わず「おいつつですか」と尋ねた。こう尋ねた自分に自分でびっくりした。自分が見も知らずの女の人に子どものことで声を掛けた、その事が自分にはすごい驚きで、これは自分が父親になったことで変わった事だといっている。

日米の母子・父子関係の比較

20年前にアメリカの文化人類学と心理学の研究者が乳児を持っているアメリカの母親と子ども、日本の母親と子どものなかでホーム・ステイして、その関係を定量的なデータに基づいて比較した。日本の母親は子どものそばにいる時間がアメリカの母親よりずっと長い。日本の母親は子どもが眠っていてもそばにいる。場合によってはおんぶしている。アメリカの母親は子どもが起きている時、または必要な時には世話をしてくれるも眠っている間は別の所に行き自分のことをしている。しつけの仕方も日本の母親は間接暗示的であり、アメリカの母親は直接指示型である。

父親についての研究は一般的に少ない。アメリカで最初に、ラムという人が「父親を見つけた」という論文を書いて、「もう一人の子どもの発達に貢献する存在」として父親を取り上げた。その後、「父親の発見」が話題となりアメリカでは父親研究が一気に広がった。その契機には離婚が増えたために、子どもにとって父親がいないと悪影響があるのではないかとという心配がある。また逆に映画「クレマー・クレマー」のように父親だけで不器用に育てているけれどもこれでいいのかという心配もある。子育てをテーマに父母の研究が広がったのはアメリカでも80年代である。

初期の研究：父母の子育てにおける相違

父親と母親は違うという前提が暗黙にあった。まだ父親が発見される前に父親がいなかった家庭の子ども達に子どもの発達にネガティブな影響があるという報告がいくつかあった。日本の例で、父親と母親との子どものしつけに対するアプローチは質的に違うということが出てきている。その中の事例で、離婚した母親とそうでない母親

と比較すると、母親である妻が夫との離婚故に、変わってしまうためと分析された。一般的に貧困故に教育的な環境が悪くなる。父親不在の直接的影響と言えないのではないかという結論がだされている。

子供からみた父親の存在

父親の存在は子どもにとってどうなっているのだろうか。子どもによる親の多様な側面を評定させたデータがある。それによると子どもの世話をよくし、接触を密度高くしている父親の方が子どもから見てあらゆる点において高い評価が得られている。これは父親が子どもに深く関わることによって子どもから高く評価される資質を持っているということである。子どもの世話をすることによって子どもは親をよく知るチャンスが増えることになる。接触がなければよく分からないので評価が低くなるということかも知れない。

また、青年期にある子どもの場合は自分の情報源、自分の精神的な支えを誰にするか、という質問に対して日本の父親はあまりあてにされていない。これもあまり接触がないのでどのような事であてにできるのかが分からないのであろう。男女の学生に悲しい知らせなど受けたときにいっしょにいてほしいのは誰か。気持ちが落ち込んでいるときに誰に理解してもらいたいのか。その人のことを思い出すだけで心休まる思いがするのは誰か。一番精神的な支えになるのは誰かといった質問をしてみると父親への期待は低い。日本の父親は職業人としてはバリバリやっているのかもしれないが、家庭内では影の薄い存在になっている。

家庭で家族からあてにされなくなる父親の存在は日本の大きな社会問題でもある。父親として子どもが生まれると自分は社会人としてしっかりしなくてはならないという自覚は確かに子どもに対する責任、特に経済的基盤を支える責任感かもしれないが、そのことのみでは失っていくものも多い。つまり日本の家庭では子どもが産まれると親子関係というけれども母子関係中心になる。家族のなかでの子育てだけではなく、社会的な保育、多様な家族役割、両親の子どもとの接触のあり方等の再検討が必要である。



(1999.10.22 講師：柏木恵子先生)

おわりに

親の多様な側面からの研究から、父親と子どもの距離は接触度が高い程、子どもの父親への尊敬の念が高まっていることも指摘されている。今後の父親研究として、子どもによく接触する父親が増えてくれば、両親の子どもへの接触の比較研究もprimary care taker, secondary care takerという視点で増えてくるだろう。(文責 IGWS)

関連する柏木先生の最近の著書

- 1981 母親の態度・行動と子どもの知的発達 日米比較研究 (東・Hessと共著)(東大出版会)
- 1983 子どもの「自己」の発達(東大出版会)
- 1988 幼児期における「自己」の発達(東大出版会)
- 1993 父親の発達心理学 父性の現在とその周辺(川島書店)
- 1994 発達心理学とフェミニズム(高橋と共編著)(ミネルヴァ書房)
- 1995 親の発達心理学 今、よい親とはなにか(岩波書店)
- 1996 「親となる」ことによる人格発達 : 生涯発達の視点から親を研究する試み(若松と共著)発達心理学研究5.1
- 1996 発達心理学への招待(古澤・宮下と共著)(ミネルヴァ書房)
- 1996 子どもの発達と父親の役割(牧野・中野と共編)(ミネルヴァ書房)
- 1997 子育て広場0123吉祥寺(森下と共著)(ミネルヴァ書房)
- 1997 文化心理学 理論と実践(北山・東と共著)(東京大学出版会)
- 1998 結婚・家族の心理学 家族の発達・個人の発達(編著)(ミネルヴァ書房)
- 1999 エッセンシャル心理学(藤永と共著)(ミネルヴァ書房)
- 1999 女性における子どもの価値 今、なぜ子を産むか(永久と共著)教育心理学研究47.2
- 1999 流動する社会と家族 社会と家族の心理学(東と共編著) 序章9 15 第6章163-196(ミネルヴァ書房)

本研究会報告における引用文献

- 亀山美津子・飯長喜一郎 1995 母親の育児不安についての日米比較調査 家庭教育研究所紀要 17,14-21
- 平山順子 1999 家族を「ケア」ということ 育児期の女性の感情・意識を中心に 家族心理学研究 13,29-48
- 柏木恵子・数井みゆき・大野祥子 1996 結婚・家族観の変動に関する研究 ~ 日本発達心理学会 第7回大会発表論文集 pp.240-242
- 総務庁青少年対策本部 1995 子どもと家族に関する国際比較調査報告書
- 柏木恵子・永久ひさ子 1999 女性における子どもの価値 今、なぜ子を産むか 教育心理学研究 47.2
- Field.T. 1978 Interaction behaviors of primary versus secondary care-taker fathers. *Developmental Psychology*,14,183-184
- 柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達 : 生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究 5.1.72-83
- 目良秋子 1997 父親と母親のしつけ方略 育児観・子ども観と父親の育児参加から 発達研究 12,51-58
- 小野寺敦子・柏木恵子 1997 親意識の形成過程に関する縦断研究 発達研究 12,59-78
- 大野祥子 1995 家庭における父親の存在感 : 父権回復は父親の存在感を高めるか? 母子研究 16,58-71
- 氏家達夫 1996 親になるプロセス 金子書房/
1999 親になること、親であること 東洋・柏木恵子(編)流動する社会と家族 第5章 137-162

アメリカ・フェミニスト社会学と女性学の現状と課題

カリフォルニア大学バークレー校女性学、社会学教授
 バリー・ソーン教授 (Dr. Barrie Thorne)
 ジェンダー・女性学研究所特別セミナー
 1999年 6月18日

1960年代末からの新しいフェミニズムの再生

今から約30年前、つまり1960年代後半からアメリカ社会に新しいフェミニズムの再生がありました。私はそのころブランダイス大学の大学院生でした。当時、黒人公民権運動の盛り上がりの中で、社会主義思想にも触れました。学生運動に身を投じBread and Rosesという女性解放運動のための組織作りに関わりました。ベトナム戦争反対運動も70年代に入り盛り上がりました。多くの男性たちは徴兵拒否をしました。これらの運動のなかで女性たちはコーヒーを入れる役割をし、タイプで書類作りを補助する仕事をしていました。「No.という男性に、女性はYes.といわなくてはならない」ということばがありました。つまり男性は体制変革のために異議申し立てをする。女性は自分の考えはなしにして、そういう男性に追従すべきだという考え方があったのです。私たちは女性だけの組織をつくり、意識変革のために小グループで討議を各地で行い、その一つの結果として「ボストン女性と健康グループ」として日本語にも翻訳されている「からだ私たち自身」(和訳、松香堂書店刊行)という本を刊行しました。それは最初は薄い冊子でした。女性が自分の体、心理、そして産む性について考え、女性の医師などから学び、女性が望む医療、産児調節についてまとめたもので画期的な本です。

女性が主体の知識生産

当時、女性学という領域はまだできていなかったもので、私は社会学の大学院生でした。社会学を学ぶところには女性存在がありませんでした。労働、経済、政治、全て男性について男性の研究者が知識を生産し、教育していました。その人々は家事などなくていい人たちです。既存の学問のどこに女性がいるのかという疑問を私はずっと抱いていました。働く女性は多くいました。しかしその多くが補助労働者、非熟練労働者でした。女性たちはせいぜいセミ・プロフェッショナルつまり、看護婦、司書、小学校の教師、社会福祉士などの職業についていまし

た。これらの職業は地位はあまり高くもなく、しかも低賃金です。

医者、弁護士、大学教授などは男性の職業ときまっていた。そして働く女性は皆、心のなかに深い「断層」をもっていました。それは家事や育児を担いながら、市場労働にも従事していたためです。二重役割拘束からくる心の断層、つまり心理的役割葛藤を「断層」と私は表現します。家事など生命再生産労働は見えない仕事といわれており、女性社会学者たちがこの領域の研究を始めました。労働し母である女性たちには余暇なるものがなくなるのです。無償労働と有償労働を一人で両方担うからです。つまり女性の仕事という視点を既存の労働と余暇の理論に適用すると説明できない部分が多くあるのです。



(1999.6.8 特別セミナー)

会話分析にみる女性の「繋ぎの機能」

ある女性社会学者がいくつかのカップルの生活をすべて許可を得てテープで録音し、その会話を分析するという研究をしました。そこからわかることは女性がより多く話しかけるが、重要な話題とされるのは男性の発言であり、男性の方がより多く会話への割り込みをするということです。女性が男性のことばを受け、それを受け入れながら次の会話へとつなぐ役目をしているのです。女性らしい役割はこう

した日常性のなかにみられます。二重役割を担うことが女性には深く内面化されているといえます。また女性が家族や親族とのコミュニケーションのために電話、手紙、e-mailなどで話をするのが「おしゃべり」として軽視されているが、実はこれが結果として親族の絆を強めていることも調査から明らかになっています。例えば妻に先立たれた高齢男性のいくつかの事例では彼らはコミュニケーションをとることをしないために妻のいなくなった後、孤独にさいなまれ、心身の健康が保てないということが報告されています。

フェミニズム社会学の視点

アメリカ社会学会のなかには「セクシュアリティ・ジェンダー部会」があり、この部会には他の部門より多くのメンバーがいます。アメリカ社会学会の「セクシュアリティ・ジェンダー部会」は1973年に組織されました。全くのゼロからのスタートでした。しかし今では他のどの部会よりも多くのメンバーを抱えるようになり、人数においても、また質的にもフェミニスト社会学が生み出したジェンダー研究が社会学会でも認知されたといえます。今、カリフォルニア大学バークレー校の社会学系の学部・学科が28あるなかで、6つの学科でジェンダー社会学を中心的に扱っています。

現在アメリカのあらゆる大学に女性学専攻、あるいはジェンダー学研究があり、専門的知識をもった人が必要とされています。組織的・専門的にジェンダー、仕事、家族、女性、性、生殖・環境などについて研究する専門領域は不可欠です。70年代のフェミニズム運動から発した女性学は女性の見えない労働について新たな光をあてました。それまでは家事、子育て、介護などは労働とみなされず、研究のテーマともなりません。

しかし今、この領域が確立してみても、既存の性差別的な状況をかえるための学問領域がその問題指摘をするにとどまるのみならば、こうした知識のあり方そのものが差別的状況を温存しているのではないかと考えることがあります。

わたしがなぜフェミニストになったかをふりかえると、家族はモルモン教徒でした。しかしフェミニズムをモルモン教は受け入れませんでした。ご存じの通りプロテスタントはフェミニズムの影響で大きく変わってきています。しかしモルモン教は変わっていません。フェミニスト社会学というのは「内

なる変革」を内包した学問領域です。

女性学専攻確立の経緯

カリフォルニア大学バークレー校にくる前に、私はミシガン州立大学で17年間教鞭をとっていました。ミシガン州立大学でも女性学専攻を専攻として確立するために努力しました。今では主専攻として認められていま



パリー・ソーン教授

す。またカリフォルニア大学バークレー校に1988年赴任したときにはすでに女性学専攻は確立されていました。バークレーの場合はミシガンより一歩進んでおり、主専攻も副専攻もあります。また他の学部との合同コースもあります。この女性学専攻は女優のパラ・ストライサンドが多額の寄付をして財政支援をしていることでも知られています。私は女性学部と社会学部の両方の学部に専任教授として任命されています。女性学部の学生は考え方が柔軟でユニークです。問題意識も高く、男女ともに他の学部の学生と異なる可能性を秘めていると感じます。というのも、女性学専攻を選ぶというのは何らかの勇気のいることです。そのために問題意識の高い学生が集まるのです。これらの学生に学際的、国際的な視点で女性学を教育してゆくことは大変意味のあることで、大学側にとってもこのような学部をもうけることは将来的に有益であると思います。近年では家族、仕事についてジェンダー分析をする研究機関が多く大学などにできています。バークレーにも新たに家族、労働研究所が設立され、多額な研究費用を得てジェンダー研究が推進されています。こうした機関は今後も重要な役割を果たしてゆくでしょう。

この特別セミナーは愛知淑徳大学図書館情報学科がアメリカ政府の助成を得てピーター・ライマン教授（カリフォルニア大学バークレー校情報学教授）、パリー・ソーン教授（同大学女性学・社会学教授）ご夫妻を招聘したために可能となった。この場を借りて謝意を表明したい。

この特別セミナーの詳細報告書がジェンダー・女性学研究所から刊行されます。希望者には無料提供いたします。

情報紹介:

報告書「女性学教育カリキュラム研究：アメリカ諸大学を中心として」

「女性学教育カリキュラム研究：アメリカ諸大学を中心として」と題して、インターネットでアクセス可能なアメリカの大学で女性学専攻をもっている41の教育機関のカリキュラムを翻訳、紹介した。この情報整理は愛知淑徳大学の個人研究助成によって可能になったものである。

女性学が日本に生まれて22年がたっているが、今、日本で女性学専攻があるのは千葉県にある城西国際大学のみである。大学付属の研究所は14程であり、近年この領域：ジェンダー・女性学関連の研究所の増加がみられる。また日本学術会議登録学会である日本女性学会の最近の傾向として若い大学院生などの入会が増えており、ジェンダー・女性学領域の研究者、関心のある人々が青年層に着実に増えていることがわかる。

他方、男女共同参画は現代日本の重要政策課題の4本柱の一つとなっている。4本柱とはつまり、経済の再構築、科学技術の発展、災害など危機管理、そして男女共同参画社会の形成である。男女共同参画つまりgender equalityについての政策は国連などを通じて地球規模で施策が推進されている。この領域の国際情報のインターネットなどを通じての蓄積は今、日々膨大な量になっている。こうした領域の知識の生産、その解説、批評は重要な知的作業領域となっており、この領域の専門家の就労機会も国内外に出てきている。

こうした状況をみると、ジェンダー・女性学領域の専攻が日本に一つしかない状況は問題である。アメリカのみならずカナダ、オーストラリア、イギリス、韓国、インド、フィリピンなどの主要大学にはほとんど女性学専攻が確立している。

新たな学問領域の紹介としてこの「女性学教育カリキュラム研究：アメリカ諸大学を中心として」の冊子でとりあげた41の大学の講座は多様で広範囲である。しかもその進展ぶりは目をみはるものがあり、主要大学にはほとんど女性学専攻がある。それは現代社会の現場と密接に交流しながら、情報収集、現状把握、問題指摘、政策提言とあらゆるレベルに広がっている。

例えば、今回本研究所主催の特別セミナーでお話頂いたバリー・ソーン教授のいるカリフォルニア大

学バークレー校の女性学専攻は1978年には専攻として確立しており、その後拡充され、いまでは30人ほどの教授人によって、文学、社会学、心理学、修辞学、歴史、文化人類学、開発論などの領域でジェンダー分析を行っている。学生も男女共におり、卒後の進路も地方公務員、社会福祉士、教員、開発途上国支援組織職員、都市計画領域などと幅広く、現代的ニーズのある領域でもある。

カリキュラム構成の概観をみると、まず基礎コースとして入門編があり、そこでは女性の現代・近代歴史、女性の社会的地位・役割についての社会学、1960年代以降の女性運動の展開、理論的展開などを学ぶ。次いで女性学上級コースとして、文学、社会科学、自然科学などの多様な学問領域でジェンダー分析を行う、選択コースとしては作家別文学作品批評、労働経済、家族社会学、政治学、心理学、宗教学、人種研究などが共通して見られる。卒業論文、調査についてはスペシャル・スタディとして論文指導があり、これも人文系、社会学系、文化人類学系、経済系など教授陣によって区分されている。

女性学はその形成当初から学際的研究領域であることがいわれていた。しかし学際研究についての明確なイメージがもてない人々にとっては学問領域としていかに成立可能かなどが常に問われてきた。しかし現実にごうして30年にも及ぶ歴史を構築してきたアメリカ女性学のカリキュラムをみると、それ自体が学際研究のあり方を明確に示してくれていることがわかる。内容に踏み込んだ情報はこの冊子にはないが講座のタイトルをみるだけでも想像力を掻き立てられて興味深い。社会・文化によって異なる講座構築が可能なことを考えてみると、この講座タイトルから日本における女性学カリキュラムを構成することは可能であろう。

巻末にはカリフォルニア大学バークレー校の女性学入門コースの必読文献資料のいくつかを紹介した。また定期的に関催される女性学関連学会、国際会議の紹介、その情報検索の方法についても紹介してある。本研究所で配布している。希望者は問い合わせで欲しい。

(國信)

情報社会からの贈り物

愛知淑徳大学文学部教授 岡澤 和世

今から約5世紀前、グ・テンベルグが近代印刷術を発明し、今からちょうど3世紀前、情報メディアである科学雑誌が創刊され、今から一世紀前、世界の主要国家で義務教育が採用され、今からわずか40年前にコンピュータが産声を上げた。情報の歴史は、すべて必要を母とし、努力を父として育った。書物の大量生産を可能にした印刷術、伝達機能を持った雑誌の発行、その書物を利用する教育、書物だけでなく、大量の情報を処理できるコンピュータの導入、これらすべては人間の限らない知的好奇心の歴史に他ならない。そして、今現在、社会はめまぐるしく変化している。この激動の世界を共有し、しなやかに、遅しく、したたかに対応していこうとする人々の欲求はいつの時代にあっても到底抑えることができない。こうした欲求が文化を育み、社会を形成し、思想を伝える言葉とメディアを次々と考案していったのである。

コンピュータは20世紀後半を飾る画期的技術革新であるばかりでなく、経済、社会、教育構造を根底から変化させる原動力であると考えられている。情報社会の大きな特徴は物的なものの相対的価値が低下し、知識や情報が著しく増大し、人間の生活の中心が「モノ」から「情報」に移行していることである。

これを「労働と雇用」の観点から見ると産業構造そのものが変化していることがわかる第一は「労働の情報化」である。その具体例は第三次産業の拡大、第一次産業の比重の低下、第二次産業の伸び悩みである。頭脳労働も機械化され、情報の収集、集積、処理、判断がコンピュータによって管理されている。その結果、仕事は従来のもとは異なり、創造的で知的な知識中心の研究開発業務が多くなり、肉体労働は減少する。

第二の特徴は「情報社会の主角」が女性だということである。ここ数年女子雇用率も着実に増加している。産業構造のサービス化、ソフト化が進むにつれて登場した人材派遣会社はこの時代の申し子と言えよう。現在登録者の94%が女性である。

第三の特徴は「流動化」である。これも現在の転職や辞職などの若者のライフ・スタイルにみるこ

ができる。これは第四の「高齢化」にも関係してくる。

女性を困む社会は今、大きく変わろうとしている。私はこれを「二千年に一度のチャンス」と呼びたい。私はジェンダ－研究の専門家ではない。しかし私のような部外者でも世界的な流れを感じることができる。第5回世界女性会議が2000年6月に国連ニューヨーク本部で開かれる。この時代に共感する仲間とこの流れを大きな期待を持って見守りたい。



1999年度ジェンダ－・女性学研究所運営会報告

今年の運営委員は渥美正子、石田好江、岡澤和世、國信潤子（所長も兼務）、都築久義、さらに非常勤講師の伊藤公雄、伊田久美子の各先生方である。従来通り、年に2～3回の運営会で事業、研究活動内容を決定をしている。99年度今後の開催事業、予算配分などを討議した。決定事項は以下の通り。

1. 「遺伝子情報とジェンダ－」についての研究会の開催（2000年1月17日 本学文学部教授堀田康雄先生）
2. ジェンダ－視点で建築、住居を考える研究会あるいはシンポジウムの開催（2000年4月24日 大阪教育大学田中恒子先生）
3. 大学院生とともに調査企画などが実施できるテーマを開発する。
4. 運営委員に男性教授にもはいつていただくことを2000年から検討する
5. 外部研究助成機関に申請を2000年に行う。
6. その他
 - ・ジェンダ－・女性学研究関連の海外の定期刊行物が図書館に配架されているので利用しにくい、研究所内におくことを検討する。

広く本学の教員、学生から本研究所の活動へのご提案、ご意見をお待ちしております。

男性の子育てについて～慶應大学通信教育学部の学生を対象としたアンケート結果から～

本学講座履習生、慶應義塾大学通信教育学部学生：河野 功一

育児に関するアンケートを、慶應大学通信教育学部の夏期スクーリング中に実施しました。質問項目は、性別役割分業観〔柏木・若松（1994）より〕、保育施設等に関して理解度、父親の育児参加についてです。調査対象者（計349人）である慶應通信教育学部の学生の有職率は女性で66%、男性で81%、子どもについて女性35%、男性43%がいると答えています。その中で興味深い結果を取り上げていくことにします。

性別役割分業観に関する項目には3つの因子があり、結果は革新的非伝統的性別役割分業観が、女性3.3 男性2.82。女性の社会進出が、女性4.17 男性3.84。男性の家事育児観が、女性 3.74 男性 3.3。数値は平均値、評価は5段階評価で1が「そう思わない」、5が「そう思う」としました。3つの因子すべてで男女間に有意差が見られました。この結果をわたしなりに解釈すれば、「女性の社会進出はもはや自明のものとなってきた。これからは、男性も家事育児に参加しなくてはならない」しかし男性のほうが女性よりも保守的傾向が強く、3歳児神話についても、男性のほうが強く持っているようです。理想の父親像については、

「家事育児も手伝ってくれる父親」としたのが、女性で41%、男性32%、「家事も育児も分担する父親」が、女性45%、男性43%の人が支持。このことから、男性が家庭進出する時代が来ていると言えます。

男性の育児参加を阻むものとして、職場での人間関係、企業による育児支援体制の普及の少なさ、男性の家事育児に対する意識、あるいは育児休暇を取る男性に対する世間の不理解などが上げられます。「この先、子育て支援制度のある企業は、企業イメージがよくなる」という質問に、84%の人が「そう思う」と答えています。男性が、あるいは働いている人が積極的に育児参加するために、企業や職場の育児支援がとて重要になってきます。企業の育児支援が、企業のメリットと結びつく事が、育児のしやすい社会へと結びついていくと思われれます。また、保育施設、保育制度の拡充も当然必要になってきます。働きながら育児しやすい社会は、女性、男性そして子どもも生きやすい社会と言えます。このような社会へと、意識の上では変化が現れているようです。

育児とジェンダー～当世、育児事情～

本学学生 藤丸 郁代

愛知淑徳大学女性学・男性学研究会通称モルガウでは、今年は「父親の育児」を主として「育児とジェンダー」を調査・研究をしてきました。さる11月20日「ウィルあいち愛知女性総合センター」において、研究発表いたしましたので報告します。

まず、上述したアンケート結果から、母親と父親の育児観の差異が明らかになり、父親は、3歳までは母親が家庭で養育し、3歳を過ぎたら保育所にあずける方がよいと考えていることがわかりました。また、父親が育児休業をとれないのは、職場の制約が強いことがわかりました。次に「3歳児神話」と「育児の性別役割分業」の関係では、3歳児神話（「子どもが3歳なるまでは、いつも家庭において母親の手で育てる」ということを昔からいわれていることとして疑いもなく信じてしまうことである）が政治的経済的社会的につくられてきた経過や背景、今なお3歳児神話が社会通念としてまた母親自身の内面の中に根強く残っていることなどが明らかにされました。結婚・妊娠・出産

で仕事をやめる母親が約80%であることから、「育児は、母親の手で」ということ、3歳までは「子どもは、母親が管理する」といった「育児負担の重さ」が理由となっていると考えられました。また、「保育所の実態」では、名古屋市の場合は、他地域より保育料が低額ではありますが、現状の延長保育は18時までで、現在の勤務状況では2重保育が必要である 1～2歳児は定員の空きがない状態で入所できずに待っている待機児童数が多くなっている 保育所の情報公開が十分でないことが問題としてあげられました。夜間の研究発表とあって参加者は少なかったのですが、ディスカッションでは 企業の育児休業の見直しの必要性と取り組み 育児の責任の所在や仕事をやめる大きな原因が3歳児神話に基づく 保育所の現状と問題点などに焦点があてられました。

今後、社会通念や現状に身を任せるのではなく自分のライフスタイルの中でどういう育児をしたいのかを考えていくことが重要であると考えました。

今、ASUのジェンダー論、女性学が面白い!!(一般の人も受講できます) 1999年度後期
愛知淑徳大学、ジェンダー女性学関連の開放講座

ジェンダー・女性学関連の開放講座について

愛知淑徳大学エクステンション・センター(EC)では多様な開放講座を学生のみならず市民一般にも開講している。そのなかに5つのジェンダー・女性学関連講座がある。なかでも現代社会とジェンダー4は「開発とジェンダー」をテーマとした日本の大学ではあまり開講されていない講座である。というのは「開発論」というのはすでにあり、経済開発、農業開発などの領域で知識の蓄積がある。日本は政府開発援助(ODA)として今世界一の開発支援を諸外国に出している。その多くが開発途上国にむけた持続可能な開発のための資金である。この講座ではこの開発援助、あるいは国際協力というものをジェンダーの視点から見直すという作業をするオムニバス講座である。

近年、国際協力事業団(JICA)でもジェンダー・メインストリーミングということばで、あらゆる工業技術研修、農業、保険、医療、教育、貧困絶滅など広い範囲の開発援助にジェンダーバランスのとれた資金投下、協力組織づくりをすることが国際的合意となっている。1999年11月に刊行された国際協力事業団評価監理室のEvaluation BulletinではJICAがはじめて実施したジェンダー評価のスリランカ調査を特集している。今後JICAの開発支援にはジェンダー視点は不可欠は評価基準となつてゆく。

このような開発視点の変化がなぜ必要なのか、また民間組織による開発においてもすでにジェンダー・メインストリーミングを取り込んでいる事例も「開発とジェンダー4」の講座で現場で開発実践をしている人々によって視聴覚教材なども利用しながら、紹介される。履修学生からは開発途上国の現状を初めて学んだという声、そして異文化への関心が寄せられている。

現代社会とジェンダー2

「芸術とジェンダー表現」後期(12回) 毎週木曜日 15:00~16:30

ジェンダーとは、私たちの頭の中にある男女の違いについての思い込みのことである。この思い込み(=信念)によって強く支えられているものに芸術がある。絵画・映画・パレエ・演劇・建築・TVドラマ等、多岐のジャンルにおいてその基礎であるジェンダーの前提に、近年疑問が投げかけられ、問い直しが始まっている。この講座では、芸術の各ジャンルにおいてジェンダーが今までどのように表現されてきたかと、それに対する批判的問題提起を各界の専門家が論じる。

科目コード: 0025 コーディネーター 教授 小倉千加子

回	月/日	テーマ	講師
1	10/7	表象としてのジェンダー	教授 小倉千加子
2	10/14	描かれたジェンダー~中世から近代まで~	金城学院大学講師 大嶽 恵子
3	10/21	文明批判とジェンダー、そしてフェミニズムの視線	
4	10/28	映画「第七官界彷徨-尾崎翠を探して」	映画監督 浜野 佐智
5	11/4	映像表現と監督のジェンダー	
6	11/11	落語における女性と笑い	落語家 桂 あやめ
7	11/18	越境するジェンダー~パレエの中のエロス~	評論家 藤本由香里
8	11/25	ジェンダーの視点から見た芸文批評	朝日新聞記者 伊藤 景子
9	12/2	住宅空間のしつらえと男女の生活	建築家 神田 雅子
10	12/9	ジェンダーフリーな自己の解放と表現	演出家 芹川 藍
11	12/16	翻訳とジェンダーの日本文化比較	通訳 三明 幸江
12	1/13	90年代TVドラマの挑戦-ポピュラーカルチャーの記号論-	教授 小倉千加子

日程・テーマ及び講師は一部変更になる場合があります。
 定員 50人
 評価 全講義回数の2/3以上出席した方には「修了証」を発行します。さらに、この条件を満たした上で、レポートを提出又は、試験を受けて合格した方には、「単位修得証明書」(2単位)を発行します。
 テキスト 特に使用しません。

現代社会とジェンダー4

後期(12回) 毎週火曜日 15:00~16:30

グローバル化する経済のもとで、開発途上国と先進産業国の格差の拡大が進行している。経済の発展とは物質的な豊かさのみでなく、人々の人権感覚を育てるものである。物質的豊かさを追求してゆくその究極に、厳しい南北格差があるとすれば、そうした豊かさには疑問が残る。開発途上国には基本的な生活基盤の確保もままならない人々が多い。外国人労働者の増加も今後さらに進行するであろう。このオムニバス講座では、この南北社会問題をジェンダーの視点から探求する。国連、NGO活動、保健リーダー育成などの活動の最前線にいる人々を講師にお迎えする。

科目コード: 0026 コーディネーター 教授 國信 潤子

回	月/日	テーマ	講師
1	10/5	オリエンテーション: 開発・ジェンダーとは	教授 國信 潤子
2	10/12	開発におけるジェンダー関係	
3	10/19	農業に見るイスラム女性の役割-トルコの場合-(1)	名古屋大学大学院国際開発研究科博士課程 星山 幸子
4	10/26	農業に見るイスラム女性の役割-トルコの場合-(2)	
5	11/2	農業に見るイスラム女性の役割-トルコの場合-(3)	
6	11/9	開発とジェンダー理論と実践(1)	日本福祉大学助教授 生江 明
7	11/16	開発とジェンダー理論と実践(2)	
8	11/30	開発とジェンダー理論と実践(3)	
9	12/7	開発と保健-アジアの保健-(1)	アジア保健研修所所長 川原 啓美
10	12/14	アジアの保健と開発実践(2)	アジア保健研修所職員
11	12/21	アジアの保健と開発実践(3)	林 かぐみ
12	1/11	21世紀における開発と新たなジェンダー関係	教授 國信 潤子

日程・テーマ及び講師は一部変更になる場合があります。
 定員 50人
 評価 全講義回数の2/3以上出席した方には「修了証」を発行します。さらに、この条件を満たした上で、レポート提出又は試験を受けて合格した方には、「単位修得証明書」(2単位)を発行します。
 テキスト 特に使用しません。

女性と社会

(各12回)

本講座は、前期、後期とも同じ内容となりますが、興味のあるコースを選択ください。 毎週火曜日 9:10~10:40

現代社会における男女の社会的関係の変容は顕著なものがある。女性の高学歴化、就学率の上昇、そして高齢化社会、少子化時代など「伝統的」性別役割は変容してきている。従来のように女性が家事・育児・介護という無償労働領域のみに限定されている社会全体がバランスを欠き、しかも女性差別の解消が不可能となり、男女の平等な関係形式にも障害となる。他方40-50才代の日本男性の自殺率が国際比較からみても高いことは、「男らしさの罫」が男性のより自由な生き方をせよとあり、家族の経済基盤を一人の男性が一生にわたって担うことが不可能になりつつある。男らしさ、女らしさを固定的な性別イメージにとらわれず、自分らしい生き方の創出の道を考える。

科目コード: 前期 0009-01 後期 0009-02

回	後期 月/日	テーマ	講師
1	10/5	統計データ、各種意識調査にみる男女の格差、国際的女性差別撤廃の趨勢、日本社会独特の固定的性別役割分業、意識としての「イエ」意識、独身貴族とモラトリアム期間の延長、性の商品化、性暴力、主婦の座の保護の意味、夫婦別姓、雇用機会均等法第二次法、男女共同参画社会の意味などについて紹介し、討論する。	教授 國信 潤子
2	10/12		
3	10/19		
4	10/26		
5	11/2		
6	11/9		
7	11/16		
8	11/30		
9	12/7		
10	12/14		
11	12/21		
12	1/11		

日程及びテーマは一部変更になる場合があります。

定員 前期・後期各25人
 評価 全講義回数の2/3以上出席した方には「修了証」を発行します。さらに、この条件を満たした上でレポートを提出又は試験を受けて合格した方には、「単位修得証明書」(2単位)を発行します。
 テキスト 「女性学教育・学習ハンドブック」国立婦人教育会館編 有斐閣(約2,000円)

編集後記

今回は父親の心理学についての研究会報告と学生グループによる男性の子育て意識調査の報告が中心です。また特別セミナーではアメリカの大学における女性学の現状です。皆様のご感想をお待ちしています。